

看取り体制充実研修体験記

研修期間 平成30年2月9日～2月16日

・特定施設

私は、死に向き合う時に自分に何ができるかを学びたいと思い、この研修に参加しました。

研修を受ける前は、死は何か特別なもので、他人事のように考えていたように思います。しかし、実際に患者さんのケアを行い、家族と関わる機会を持ち、講義を受け、生きているものは必ず死があること、それは自然なことで誰もが通る道であることに気づきました。そして、死を自分のこととして捉えられるようになりました。

最期の時をどう過ごすか、そして、私達がどう関わるかを、その時に考えるのではなく、ご本人が元気な時からご家族も含め、死について向き合う機会を作り一緒に考えていく意思決定支援が、看取りで重要なことであることを学びました。

(社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員)

研修期間 平成30年10月15日～10月19日

・特別養護老人ホーム

『介護施設とは生活の場であり、毎日の繰り返しの中で自然な形でおとずれるのが「死」であり、「死」とは生の延長線上のことである。その最終段階で出来る医療は少なく、ご利用者（高齢者）にとってそれは負担にもなるだろう。』

医療よりケアの充実に視点を向けることが大事だという事を今回の研修で気付きました。利用者に穏やかな時間と空気を作り出すことは、私達職員の意識一つで変わるのだと理解する事ができました。ケアする側の《業務》という都合で押しつけになっていないか？利用者本人・家族が主体のケアを提供できているのだろうか？と振り返りました。

長い期間身近で一緒に過ごしてきた利用者の人生最期の時を、家族と共に温もりの中でケアを通してお手伝いさせていただきたいです。揺れ動く家族の気持ちに共感し、何度も話し合いを重ねていくことが私達にできる事だと思います。人の最期の時を看取るということは、声をかけ、心にかけて、触れ・寄り添う事だと思います。

(介護福祉士)

研修期間 平成30年10月15日～10月19日 ・特別養護老人ホーム

「看取り」というと、死という怖さと亡くなった後は何も評価的な部分がないので苦手感じていました。しかし、この実習で「看取り」は死に向かう支援ではなくて、最終地点に着陸するまで、その人らしく生きていく過程を、専門性をもって支援していくことであると学びました。利用者本人の人生における価値あることを継続し、居心地良く過ごしてもらうには、日々のコミュニケーションが重要です。その過程をスムーズにする為に知識と技術が必要なので、これからもっと能力を高めたいと思いました。

私は、ご本人・家族と日々接し、身近な所で仕事をさせてもらっています。今回の実習で、とても重要な役割を担っていると実感しました。これからは専門職としての意識を持ち、看取り介護に携わっていこうと思いました。

(介護支援専門員、介護福祉士)